

## 熊本・宮崎両県の祭りや神楽に見られる山の人々の暮らし

桑畑美沙子・角野育子\*

### Life in the kumamoto and Miyazaki Prefecture as Reflected in Festivals and *Kagura*

Misako KUWAHATA, Ikuko KAKUNO\*

(Received May 23, 1994)

#### はじめに

縄文時代が終わるまでの長い間, わが国の食生活は狩猟・採集と漁撈に依存して営まれていた。その食生活に大きな変化が生じたのは弥生時代のことである。水田稲作が伝来し, その稲作がわが国の風土に適合し, 米を主食とする食文化が芽生えたのである<sup>1)</sup>。その後, 中国大陸・朝鮮半島あるいはヨーロッパから伝えられた食の文化を受容しながら, 米などの穀類のご飯を主食とし, 季節の野菜や魚の持ち味を生かして醤油・味噌・ダシなどで調味したおかずを副食とする独特の食事文化が形成され, 近年の日本型食生活<sup>2)</sup>にいたっている。

ところが, 最近, その食生活に変化が生じてきている。加工食品・外食を利用し好きな時間に好きなものを好きな場所で個々に食べる食生活, あるいは内食と外食と中食<sup>3)</sup>の区別がつかない食生活, 手軽に楽しくファッションの一つとして食べる食生活のように, 飢えをしのぐまたは健康維持・増進のために, あるいは決まった時間に決まった材料で決まった人が作り決まった場所で食べていた, 従来の食生活とはかなり様相の異なる状況が生じてきたのである。昨今のこのような食生活現象は, まさに多様な価値観, 急激な経済成長, 複雑な社会構造, 変化しつつあるライフスタイルなどが微妙に影響し反映した結果<sup>4)</sup>であろう。

ところで, 生活事象を学習の素材とする家庭科教育では, このような現象にどう対応すればよいのであろうか。

小学校における家庭科の食物では, 長い間, 野菜の油炒め・野菜サラダ・目玉焼きなど油を使ったいわば洋食的な調理が教材とされ, しかもこれらの教材がかなりのウエイトを占めていた。これらの調理教材は, 炭水化物起源のエネルギーに偏っていたわが国の食生活の実態をふまえて, 脂肪, 特に植物性油脂の摂取を増やしてPFC比を是正しようとする栄養指導的立場から考えると理解できないことはない。しかし, 家庭科教育の方法論的立場からいうと, 生活改善の方策を教師側から提示する教材であり, 現状を認識させた上で課題解決の方向・手立てを子どもたちにつかませる, つまり生活的自立能力を培う授業展開をするのには無理な教材と思われる。著者らは, 生活的自立能力を培うには食と人間の本来のなにかかわりを認識させ, 食生活における課題解決のためになされているさまざまな取り組みを紹介する授業展開が効果的であることを授業実践を通して既に検証を進めている<sup>5)</sup>。

---

\* 熊本県千丁中学校

では、食と人間の本来的なかかわりを認識させるにはどのような情報を提供すればいいのであろう。柴田や石毛は、食と人間の根源的ななかかわり、つまり食文化を解明するために食生活を地域あるいは時間つまり歴史的な視点で明らかにする必要がある<sup>6)</sup>としている。同様の視点から、著者も南九州に住むお年寄りに昔の食生活に関する聞き取り調査を既に行っている<sup>7)</sup>。

さて、家庭科教育の基盤を構成する家政学では、このような観点での研究はどの程度進捗しているのだろうか。学会誌の掲載論文を分析したところ、食文化研究は近年やっと緒についた段階であり、研究対象としている時代・地域・階層に偏りが認められた<sup>8)</sup>。具体的に述べると、時代としては論文発表の現時点つまり「現在」を、地域としては都市や平場の農村などいわば「開けた」地域を、階層としては「中流」以上の人々の食生活を研究の対象としている例が多かったのである。つまり、明治から昭和初期という食生活における近代化の影響の少ない時代を対象とした研究は些少であり、あるいは山間・僻地や過疎地、被差別部落・在日・「山の民」・「海の民」など、わが国の歴史上日が当たらなかった「少数派」の人々の食生活を対象とした研究は皆無であった。したがって、今後の食文化研究では、そのような少数派の人々の明治から昭和初期にかけての食生活を掘り起こす必要性が認められた。

著者らは、このような観点から九州脊梁地帯で狩猟採集と焼畑に依拠して暮らしていたお年寄りあるいはその家族をインフォーマントとして1930年頃の食生活に関する聞き取り調査を行った。その結果、自然と共生しながら織り成された山間部の多彩な食生活の実態<sup>9)</sup>が明らかになると同時に、猪を神饌としあるいは直会の食材にする祭りや猪猟を表現している神楽が今に伝承されている事例が見いだされた。そこで、猪を神饌としあるいは直会の食材にする祭りや猪猟を表現している神楽が今に伝承されている事例について聞き取り調査を行い、あわせて熊本・宮崎両県内の各市町村を対象とし、猪との関連を有する神楽や猪と関連のある神饌などについてアンケート調査し、山の暮らしとのかかわりを検討したところ、興味ある結果が得られた。本報では、猪を奉納する祭りの事例とアンケート調査の結果について報告する。

## 調査方法

### 1. 聞き取り調査

猪を神饌として供えるあるいは直会の材料とする祭り、または猪に関連のある神楽については、宮崎県西都市銀鏡の銀鏡神社の例大祭と宮崎県東臼杵郡高千穂町高千穂神社の『シシカケ祭り』の2事例について調査した。本事例を調査対象としたのは、九州脊梁地帯の銀鏡で狩猟採集と焼畑に依拠した1930年頃の食生活について聞き取り調査をしていたところ、銀鏡神社の例大祭で猪が神饌として供えられかつ直会の材料になり銀鏡神楽の中に猪猟を模した舞いが含まれていること、さらに高千穂のシシカケ祭りでも猪が供えられていることを知ったからである。

インフォーマントは表1に示したようにその祭りや神楽に詳しい保存会長や神社宮司、調査時期は銀鏡神社が1991年の8月・12月および1992年4月、高千穂神社が1991年の12月である。調査内容は、神楽が行われる神社の所在地・祭りの日時と由来、祭り時の神饌・直会・神楽の最中にふるまわれる食事の内容、神楽の内容である。

なお、銀鏡神社の存在する銀鏡は町村制の施行された1899(明治22)年から1962(昭和37)年3月まで東米良村の1区域として存在し、同年4月1日西都市に編入され<sup>10)</sup>、現在にいたっている。一方、高千穂神社のある三田井は1899(明治22)年から押方村・向山村と合併して高千穂

表1. 神社名とその所在地とインフォーマント

事例	所 在 地	インフォーマント
1	銀 鏡 神 社 宮 崎 県 西 都 市 銀 鏡	A 銀鏡神楽保存会長
		B 銀鏡神社宮司
2	高 千 穂 神 社 宮 崎 県 東 白 杵 郡 高 千 穂 町	C 高千穂神社宮司
		D 高千穂八幡宮宮司
		E 郷土史研究者

村, 1920 (大正9)年4月1日に高千穂町となり, 以後, さらに1956 (昭和31)年9月30日に岩戸村と田原村が, 1969 (昭和44)年4月1日に上野村が合併し<sup>11)</sup>て現在の高千穂町にいたっている。

## 2. アンケート調査

1992年の7月と9月の2段階に分けて郵送法で行った。7月の第1次調査は熊本・宮崎両県内の各市町村教育委員会の社会教育係を対象に神楽を奉納する祭り名と神楽に詳しいインフォーマント名をたずねた。9月の第2次調査では, 第1次調査で紹介されたインフォーマントに, 神饌の内容, 直会などで供される食事内容および祭りで奉納される神楽で猪に関連のある神楽名とその内容をたずねた。回収率は第1次調査が85%, 第2次調査が58%であった。

## 結果及び考察

### 1. 祭りや神楽の事例

#### (1) 宮崎県西都市銀鏡：銀鏡神社の例大祭と『銀鏡神楽』

銀鏡神社はいわながひめのみこと おおやまつみのみこと かねがねしんのう磐長姫尊・大山祇尊・懷良親王を祀り, 磐長姫尊の銀の鏡と懷良親王の割符の鏡を御神体としている<sup>12)</sup>。銀鏡神社では春記念・夏記念・秋記念・冬記念の4つの記念がある。12月12日から16日に行われる銀鏡神社の例大祭はこの冬記念にあたる。例大祭では, 12日に『門注連祭』, 13日に『御遮作り』と『星祭り』, 14日に『前夜祭』, 15日に『本殿祭』, 16日に『シシバ祭り』と『六社稲荷祭り』が行われる。

例大祭の流れは以下のとおりである。

12日に, 宮司は社務所・神屋の祓いをし, 社務所前の門柱に旗を立て, 祭りの間の調理に使う竈を清める門注連祭を行う。

13日に, 神職と祝子でさまざまな御幣を作り, 神楽を舞う『外神屋』の舞台を作る。ほぼ準備の整った夕方に『内神屋』で神楽式1番の『星の舞』を舞う<sup>13)</sup>。なお祝子とは銀鏡神社の祭りごとをなす旧家で, 神楽も12祝子によって舞い演じられてきたとされている<sup>14)</sup>。また, 神職と祝子のことを祭員と称している。

14日に祭員は早朝から外神屋の飾りつけと遮立てを行う<sup>15)</sup>。午前中に準備を終えると祭員は帰宅して沐浴し白衣に黒紋付を着け『面さま』を迎えに行く。面さまとは神楽に使う神面自体と神楽の最中に面をつけて舞う人をさす。これは面をつけた人にはその神が宿ると考えられているためである。なお面をつけて舞う人は世襲で, 各面さまを祭神として祀る銀鏡内の神社の社人がこの役を担当する<sup>16)</sup>。午後6時ごろ, 銀鏡神社への入り口にあたる銀鏡川にかかる囿橋に, 各部落から5体の面さまが法螺貝・笛・太鼓の奏楽とともに遮をなびかせながら参集してくる。それぞれ

の面を祭神として祀る社人は、写真1や2のように神面の入った面箱を風呂敷に包み背負ってくる。

面さまが銀鏡神社に到着すると、5人の社人は逆に向かって左側に座り、供えられた串刺し豆腐を食べお神酒を飲む。各面さまが内神屋の正面に安置されると『座つき』が行われる。

座つきの料理は表2に示したようにモツソ飯・豆・吸い物・豆腐入りの煮込み・折・刺し身・豆腐の串刺しである。モツソ飯とは高盛にしたヘソ飯のことで、以前は2合5勺だったが、現在は1合5勺にしてある。

座つきの食事が終わると、内神屋と外神屋に神饌が供えられる。写真3や4に示した『オニエ』としての猪頭と20cm大の重餅が献饌される。オニエとは猟師が奉納した猪頭で『サチミタマ』とも称されている。猪頭は捕獲された猪頭を例大祭前1週間からオニエ用に保存しておく。そのため、猪頭数は年によって異なり、多いときで十数頭にのぼるといふ。ちなみに1991年の例大祭では8頭分の猪頭が献饌されていた。

献饌が終わると宮司の祝詞奏上後、式2番から式31番の神楽が夜を徹して舞いあげられる。

神楽奉納の最中、観客には『ヘソメシ』がふるまわれる。一つのヘソメシを観客は順に回して食べる。

空も白みかけるころ、式29番『獅子舞』が舞われる。獅子は獅子面を被り、山の神は右手で一本の棒を持ち左手で獅子の尻尾を握って舞う。その後方に続く他の6神も、それぞれ棒を持ち、笛や太鼓と合わせて獅子面同様お互いの顔を棒の先端で軽くたたきあいながら舞う。このとき獅子はころんで背中を床にこすりつける『ニタズリ』を四方で行い神屋を一周して終わる。

式31番『鎮守』で前夜祭は終わる。鎮守は『クリオリシ』とも『逆倒し』とも称され、4人の舞い人が舞いを舞いながら本体の逆から外神屋に張ってある注連縄の端をはずして左手に持ち、右手に鈴を持って舞う。この舞いが終わると逆を倒し、祭員らは全員で外神屋をくずし『ヤマ』を作る。

式31番の舞いが終わると本殿祭になる。本殿祭のことを銀鏡の人々は『サイテンシキ』と称している。サイテンシキとは前年の大祭以降に生まれた子どもの初参りのことである。男の子は金の御幣で、女の子は銀の御幣で頭をなでてもらい、神前に供えてある甘酒を

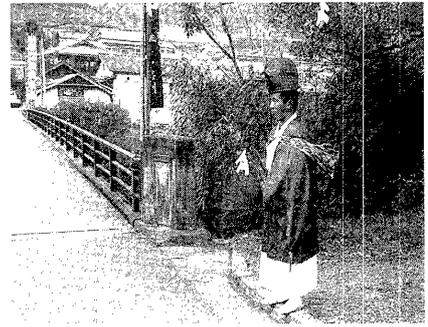


写真1. 「面さま」の入った箱を背負った社人



写真2. 銀鏡神社に向かう「面さま」の行列



写真3. オニエの猪頭を供える祭人

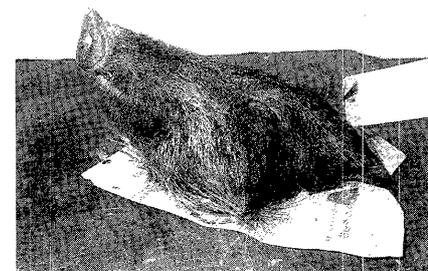


写真4. オニエとして使用された猪頭

表 2. 銀鏡神社大祭の食事

日	時	料 理	備 考
12日	昼	味噌汁 飯	(2升)
	夜	吸い物 刺身 煮しめ 飯	椎茸・うずら卵・かまぼこ・葱 人参・大根・こんにゃく・豆腐・里芋
13日	昼	味噌汁 飯	(4升)
	夜	煮しめ 酢の物 飯	人参・大根・こんにゃく・豆腐・里芋・テンブラ・昆布 (4升)
14日	昼	味噌汁 飯	
	座	吸い物 豆 煮こみ	人参・大根・豆腐・じゃが芋・かしわ
	つ	折 刺身 串ざし モッソ飯	豆腐
	夜	うどん 漬物 食にぎり飯	椎茸・かまぼこ・葱
15日	朝	味噌汁 飯	
	昼	シシトウ・シー	米・猪肉
16日	直 会	味噌汁 白あえ 吸い物 刺身 飯	鯉

いただく。ただし子どもには飲む真似だけで実際には親が飲む。本殿祭の神饌は白米・麻緒・洗い米・清酒・水・いりこ・塩・根つきの青菜である。

本殿祭が終わると式 32 番『シントギリ』となる。本殿祭の最中、シントギリの舞い人は、台所の横の部屋で前夜祭でオニエとして供えてあった猪頭の肉や舌の塩焼きや脳みその刺し身を食べ焼酎を飲みながら出番を待つ。脳みそはもともと塩味があるので味付けはゆず酢のみである。シントギリの舞い人が準備する部屋は女人禁制である。

出番前になるとマブシの神とよいわたつのみこと(豊石立命)<sup>17)</sup>とセコの神くしいわたつのみこと(櫛石立命)<sup>18)</sup>の舞い人は、それぞれ面や手ぬぐいの頬かむりの上にシュロの皮のかつらをつけ、シュロの皮の脚絆・腰あてをあて、『テゴ』を背負って弓矢を持つ。マブシの神は翁で股間に大根で作った男根をぶらさげ、セコの神は姥である。準備が整うと2人は台所の出口から「ホーイ、ホーイ」と口々に叫びながら出てくる。昨夜、避を崩して作ったヤマを山に見立て、2人は猪猟の様子を演ずるのである。外神屋に入ってきた2人は耳に手をあてて猪の動きを探るような所作をし、狩行司に扮した銀鏡神社の宮司と「今

日はオニエの猪だから絶対に逃がしてはならない」という主旨のことを問答し、『トギリ』を始める。トギリとは猪の足跡やニタズリの跡を見て猪を探し出し猪を追う所作である。近くに大きな猪がいることを見定め、『マブシワリ』をする。『マブシ』とは狩倉あるいは狩場のことで、マブシワリとは猪の通り道である『シシウジ』に猟師を配置することである。このマブシワリの時には、各狩倉に実在の猟師の名前を呼んで配置する。マブシワリがすむと、二人はテゴから『メンパ』を出して弁当を食べるそぶりをする。食べる前になたに見立てた棒でヤマの枝を切る真似をして箸を作る。「犬にも」と言って食べ物を箸で投げ与える仕草をする。そこに狩行司から「犬声のしとっぞ」と声がかかると二人はあわててメンパをしまい『テゴ』を背負って弓矢を手取る。「こりゃー太てえぞ」と姥から声をかけられると、翁は猪を怖がってそばの木にしがみつくと。何度か同じような問答と所作を繰り返した後、翁はようやく一矢射り再び木にしがみつくと。翁は猪が怖く勇気が出ないのである。姥の方は勇気があり、一矢、二矢と矢を放つ。様子を見ていた翁も写真5のように木からおりて一矢放ち猪を射止める。『イノコシバ』をつけたまな板が猪である。その猪をヤマから引き出し、尻尾を棒で切り取るまねをして「へいへーい、大物が捕れたぞー」と叫ぶ。棒でヤマの手頃な枝を切る真似をして杖を作り、翁が重そうにまな板の猪を背負う。二人は「若きゃあもんに知らせてろ」、「大物が捕れたぞー、へいへーい」と叫んで出てきた台所に帰るのである。

台所にもどると、翁役の舞い人は面をはずして写真6のようにイノコシバのついたまな板を竈の上の梁につるしてシシトギリは終わりになる。

シシトギリが終わると式33番『神送り』である。ムシロにのせた臼を前後から抱え、面を前後に被った2人と、杵をくるくるまわす1人が鬼神歌を歌いながらつつくような格好で神社の前庭を一周し社務所側から台所に入る。他の祝子もその後が続いて一列に並び、一握りの白米を入れた膳を持って扇子で膳の縁を軽く叩きながら台所に入る。この時、祝子らは「ハラエタマーエ、キヨメタマーエ」と唱える。

以上の33番の神楽が終了すると、社務所に祭員が集まり直会の『イタシキバライ』が行われる。

大祭開始から15日の直会が終了するまで社務所は台所を除いて女人禁制となる。そのため直会を始め、祭り中のその他の食事の配膳などは世話役の男性が行う。山の神は女性なので女性が立ち入ると神様に対して失礼になるからだという。昔は台所も男性が担当していたが、現在は大きな竈で大量の飯を炊ける人が少なくなり、女性が担当している。

直会の料理は『シシズウシー』<sup>19)</sup>である。前夜祭でオニエとして供えられていた猪頭の肉と



写真5. 弓を射るマブシの神



写真6. シシトギリで猪に見たてたまな板を台所の竈の上の梁につるすマブシの神役の舞入

白米で作るが、祭員だけでなく観客にもふるまわれる。

16日の朝8時ごろ、シシバ祭りと六社稲荷祭りが同時に行われる。シシバ祭りは銀鏡川の河原で、六社稲荷祭りは河原の上の山に鎮守する六社稲荷で行われる。シシバ祭りは獣の霊魂に対する鎮魂の祭りである。銀鏡川河原の大きな自然石の横で流木を集めて焚火をし、14日の前夜祭で神饌として供えられた猪の頭を生木の枝にひっかけて火にかざす。その猪の耳を切り落とし七切肴として串に刺し、大きな自然石の前に立ててある御幣の前にお神酒・米・塩などとともに供える。火で焼いた猪の肉は祝子が食べる。

シシバ祭りと六社稲荷祭りが終わると宮司は社務所・舞殿・竈を祓い清めて祀り、直会で大祭は終了する。

この後、日時は決まっていないが、『俎板オロシ』が行われる。シシバの時にイノコシバを結びつけ猪に見たてられたまな板は大祭終了後も台所につるされている。大祭後初めて猪頭が奉納されたときに、そのまな板をおろし、そのまな板上で猪頭の肉を切り、神に捧げる。俎板オロシの月日は猪頭が奉納された日となるので、猟師の意志によって左右され宮司にもわからないという。俎板オロシ終了後、宮司は『七コウザキ』をまわる。まわりおえると大祭とその一連の行事が終了する<sup>20)</sup>。

#### (2) 宮崎県東臼杵郡高千穂町：高千穂神社のシシカケ祭りと『シシカケ神楽』

シシカケ祭りは旧暦12月3日に宮崎県東臼杵郡高千穂町の高千穂神社で行われる。

高千穂神社のすぐ裏手に『鬼八大明神』を祀った『鬼八塚』がある。鬼八大明神は霜害をおよぼす神なので、霜害のおそれのあるこの時期に猪を神饌としてささげ神楽を舞って鬼八の霊をなぐさめ霜害防止を祈願するという。

祭りの準備は早朝から始められる。まず竈を祓う。この竈で神饌として神に供える飯をたいたり、直会の料理を作るからである。

次に、本殿の祭壇の前にみかんと猪一頭を供える。この猪は内臓を出したままの一頭である。

その後で、本殿の隅で宮司と巫女らが神饌として供える白米の飯を用意する。白紙をしいた直径30cm程度の大きな木製の椀と直径10cm程度の小さな椀に白米飯を少しずつ盛り、白木の箸を添える。大きい椀を猪の前に2個、小さい椀を本殿内の各神々に供える。各部落に祀られていて、高千穂神社が統括する社にもそれぞれ小さな椀に盛った白米飯を供える。

神饌の準備が整うと『鬼八塚御前祭』が行われる。鬼八の霊を祀った塚を宮司が祓い、霜害をおよぼさぬよう祈るのである。

鬼八塚の祓いが終わると、宮司は各部落に祀られている社を一つ一つ歩いてまわりそれぞれ祓い祈りを捧げる。宮司が鬼八塚と各部落の社を祓い祈っている最中、神社境内では各地区総代が長い棒を空高くかかげ「ホーイ、ホーイ」と叫びながら歩き回り、本殿では神楽が2番舞われる。

これらの準備がすべて終わると、本殿に宮司7人と氏子代表らがそれぞれ座り、シシカケ祭りが始められる。

まず、宮司がご神殿と猪を御幣で祓う。

次に、宮司が「カイヒ」と声をかけてご神殿を開き、猪とともに供えられている飯の入った椀とみかんをご神殿の前に供える。

以上がすむと、シシカケ神楽別名『ササフリ神楽』が奉納される。7人の舞い人と3人の氏子総代が1人ずつ猪の前で同じ舞いを舞うのである。猪の前で礼と拍手を行い、猪の上に供えてある御幣変わりの笹竹を、写真7のように左右に振って神楽歌を歌う。神楽歌は氏子に代々傳承されているので各家によって多少異なっている。

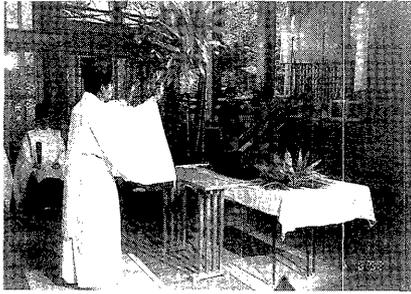


写真7. ササフリ神楽を舞う舞人

すべての舞い人と氏子総代が舞い終わると、宮司が「たまぶしをたてまつって拝礼」と声をかけ、まず氏子総代会長が拝礼し、続いて総代が拝礼して、宮司が「ヘイヒツ」と声をかけてご神殿を閉じる。

ヘイヒツすると宮司は氏子総代や集まった観客らに挨拶をして直会となる。

直会では、猪肉と豆腐・こんにゃく・大根・人参・ねぎを醤油と砂糖で調味した『シシダキ』・白米飯・酒が出される。ただし、シシダキ中の猪肉は神饌として供えられた猪ではない。

以上述べたように、銀鏡神社の例大祭では、神饌として猪頭が供えられ、獅子舞とシシトギリという猪の関連した舞いが奉納され、直会で猪を食材とした料理が食されている。高千穂神社のシシカケ祭りでも神饌として猪が一頭丸ごと供えられ、直会で猪を用いた料理が食されている。

須藤によると、民俗芸能はほとんどが他所からもたらされ、その土地の生活を反映することでその土地に定着し伝承されていく<sup>21)</sup>という。銀鏡神社の例大祭と高千穂神社のシシカケ祭りに見られる上記の現象も、両地域の人々の暮らしが反映されていたから今に伝承されているものと考えられる。このことを、両地域の風土と関連づけて検討してみよう。

銀鏡は、南郷村、椎葉村、西米良村に隣接する米良荘にあり、周囲を龍房山・地藏岳・オソレ山・空野岳・烏帽子岳・赤髭山など標高1000メートル前後の山々に囲まれている。高千穂は、祖母山・大崩山・国見岳など標高1700メートル強の山々の山間を流れる五ヶ瀬川の峡谷に面している。このように、両地域ともに九州脊梁地帯の山間部に位置している。このような自然環境のゆえに、かつて、両地域には照葉樹や落葉樹などが茂り、木の実が潤沢に実り、その木の実を食する獣が棲息していたはずである。木の実は人間にとっても重要な食材<sup>22)</sup>であったが、獣にとっても重要な食物である。事実、米良山には、熊・鹿・猪・羚羊などの大型獣、狐・狸・貂・兎・猿などの小型獣が多数生息し、とくに猪は多かったという<sup>23)</sup>。

また、かつて、九州は我が国最大の焼畑卓越地帯であり、中でも九州山地中央部にある熊本県五家荘を中心とする地域に、焼畑農家率・同面積率ともに極めて高率を示す町村が集中していた<sup>24)</sup>。九州脊梁地帯にある熊本県五木村や宮崎県椎葉村ではシイやカシやサカキなどの照葉樹とコナラやクヌギなどの落葉樹がモザイク状に分布し<sup>25)</sup>、これらの木々を切り拓いて焼畑農耕が行われていた。

ここで、わが国の各市町村別の焼畑戸数や面積が掲載されている1950年世界農業センサス(以下、50年センサスと略す)<sup>26)</sup>で銀鏡や高千穂の状況をみてみよう。銀鏡神社の1950年当時の行政区域である東米良村は、農家総数453戸、常畑総耕地面積202.53町歩(水田112.01町歩、普通畑82.76町歩、樹園畑7.76町歩)であり、農家1戸あたりの常畑総耕地面積はわずかに0.45町歩で宮崎県平均の0.74町歩よりもはるかに少ない。さらに農家総数453戸中焼畑農家が223戸で焼畑面積が15.74町歩であり焼畑農家率は49.2%で県平均よりもはるかに高い。一方、高千穂神社のある高千穂町は農家総数1057戸、常畑総耕地面積715.94町歩(水田385.89町歩、普通畑321.39町歩、樹園畑8.66町歩)であり、農家1戸あたりの常畑総耕地面積はわずかに0.68町歩で東米良村と同様に県平均の0.74町歩よりも少ない。また、農家総数1057戸中焼畑農家は9戸で焼畑面積が2.84町歩であり、焼畑農家率は0.9%で県平均の1/8弱である。したがって、50年センサスによる

と、東米良村は焼畑によって生活が営まれていた地域と考えられるが、高千穂町はそうとは考えられない。しかし、インフォーマント E から「祖母の時代（注：1900年ごろ）には焼畑が行われていた」という聞き取りが得られたことと、高千穂町の農家1戸あたりの常畑総耕地面積が県平均よりも少なく、さらに1戸あたりの焼畑面積が0.31町歩と大であることから、遠い昔、高千穂町も東米良村と同様に焼畑によって生活が営まれていた可能性が推察される。

さらに、猪は稗や粟が植えてある焼畑に出没し、収穫直前の作物を食い荒らす。したがって、猪の防禦は山で暮らす人々あるいは焼畑農民にとって重要かつ不可避の仕事であった<sup>27)</sup>。

同時に、他の地域と隔絶され、しかも限られた耕地で場合によっては生産性の低い焼畑で生計を維持してきた人々にとって冬場に捕獲される猪は、生命をつなぐ貴重な食材でもあった<sup>28)</sup>。

延享3年（1846）の『御勘定所江差出改帳』によると、米良山では642の屋舗数に対し664挺の鉄砲数が記録され<sup>29)</sup>ている。元禄元年（1688）の甲斐で518村の鉄砲数が1595挺で平均1村に3挺<sup>30)</sup>であることからわかるように、この鉄砲数の多さは特異であり、米良山における当時の暮らしに鉄砲が必要であったことが推察できる。

以上のことから、銀鏡や高千穂のような山の地域で暮らす人々にとって、猪は作物を荒らす害獣としては減少を、貴重な食料源としては繁殖を祈り豊猟を期待する獣であったと推察される。

では、このような猪と地域の人々とのかかわりは両地区の祭りにどのように反映されているのであろうか。銀鏡と高千穂の祭りについてそれぞれに見てみよう。

まず銀鏡であるが、オニエの猪頭を奉納した猟師には山の神がすぐに再び捕らせてくれる<sup>31)</sup>とか、獅子舞は山の神が作物を守護することを表現した舞いで、山の作物をむやみに荒らさぬよう神が猪を遊ばせる所作があり、獅子が転んでニタズリをする際に四方に張り巡らした注連縄の外に転げ出たらその年は不作になるとか、シトギリは1960年代まで焼畑農耕をしていた銀鏡地区で猪害から作物を守るとともに大切な食料源を確保する手段でもある猪猟を模した舞いで、豊石立命扮する翁がマブシワリする際に翁に名前を呼ばれた猟師は猪をたくさん捕獲できるという言葉がある。

次に、14日に面さまが銀鏡神社に到着した際に5人の社人が食べるあるいはその後の座つきで出される豆腐の串刺しは猪の代用品と言われている。さらに15日の直会では猪の頭肉を使ったシズブーシーを、16日のシシバ祭りの直会では前夜祭で神饌として供えられていた猪の耳を切り落として串刺して供えた後に猪の頭肉を細切りし塩焼きして食べている。

なお、オニエであるが、昔、オニエとしては猪頭だけでなく鹿頭も奉納され、しかもその鹿頭は猪頭の代用ではなくむしろ猪頭に優るオニエだったという。猪頭も鹿頭も、『山清め』の狩でとれた猪や鹿の頭が奉納されており、山清めの狩の日程は陰暦11月13日から15日の大祭へのオニエの奉納を前提にして決められていた<sup>32)</sup>という。さらに、昔は猪頭も鹿頭も上がらないときは豆腐で代用されることになっていたが、須藤によると1969（昭和44）年以降毎年猪頭が供えられているという<sup>33)</sup>。

さらに、シトギリとシシバ祭りでは、まず狩のさまをシトギリという形で演じ、次いで狩猟の獲物である鳥獣の霊を祀っておくり、ふたたび狩を開始するという狩の一連の流れが演じられている。これは稲作の過程を模擬的に演ずる田遊と類似しているが、田遊と異なり、女性も子どもも重要な働き手である稲作と違い狩では女性や子どもが参加できないので、シトギリを通じて女性や子どもに狩の実際を知らしめるという意味があるとも思われる<sup>34)</sup>。焼畑では女性や子どもも猪と対峙しなければならない。知識があるのとないのとでは対処の仕方も違うはずであると考えれば、銀鏡地区では生きていくための生活の知恵をシトギリによって伝授している

といえよう。

一方、前述したように、高千穂神社でも神饌として猪が供えられている。しかし、高千穂神社の宮司であるインフォーマント C によると、猪を神饌として供える理由は記録としても言い伝えとしても残されていないし、シシカケ祭りの由来は鬼八の霜害を防ぐことであるという。また、直会で供されるシシダキに用いられる猪肉は神饌として供えられた猪ではないという。

前述したように、高千穂町では、50年センサスによれば焼畑はそれほど行われていなかったものの、聞き取りからより古い時代に焼畑が行われていた可能性が示唆された。この推察に加えて、シシカケ祭りで舞われる神楽は御幣代わりに笹竹を使用し笹竹を左右に振る簡単な舞いであることから高千穂地方に伝承されている神楽の中では最古のタイプであるという聞き取りと、「シシカケまつりも霜の降りる時期に猪がきて畑を荒らすので、古くは猪害と霜害の両方を防止する目的があったのでは」というインフォーマント E の話から、シシカケ祭りにおける猪の神饌も、銀鏡同様に焼畑における猪害阻止と同時に山の地域における冬場の大切な食料である猪の豊猟を祈る気持ちが込められてのことと考えられる。

ところで、銀鏡神社と高千穂神社ではいずれも山で暮らす人々と猪とのかかわりが神饌や神楽にそれなりに反映されていたが、その程度は銀鏡の方がより鮮明であるように感じられた。このような違いはなぜ生じているのであろうか。

わが国の焼畑農業は、常畑耕地が乏しく農業生産性の低い山村地帯で食料自給態勢を支えるものとして経営されてきた<sup>35)</sup>。それが、造林業が進展し林野の商品生産的利用が発達あるいは水田が拡大して、商品経済が浸透し次第に焼畑依存の食料自給態勢が崩壊したのではなかろうか。そして、その崩壊速度は地域における流通経済の浸透の度合いによって左右されたと思われる。このような観点で銀鏡と高千穂を比べると、高千穂神社はすぐ近くを国道218号線が走っているが、銀鏡神社は国道219号線の最も近いバス停まで約9キロ、しかもそのバス停までの道が舗装されたのが1970年代という隔絶山村<sup>36)</sup>にある。交通の便がよくなればなるほど、焼畑に依存した山の暮らしは崩壊し、祭り・神楽などの伝統芸能が仮に伝承されていてもその伝統芸能の背景にある人々の暮らしはベールの中に包まれてしまうのであろう。つまり、交通の便のよい高千穂、ごく最近まで陸の孤島・隔絶山村であった銀鏡という違いが、山の暮らしの伝承度に違いを生じ、さらにそのことが今回の事例で明らかになったような違いへと転じたものと思われる。事実、今回の聞き取りによると、銀鏡では、細々とではあるが1960年代の終わりまで焼畑が行われていた。

以上述べたように、若干の違いはあるものの、2事例から神楽はもちろん祭り全体から山で暮らす人々の営みが無理なく自然と共生している様子がうかがわれた。山内は銀鏡神楽について「演じられるすべての曲が神話と直結している。しかもそれが、山村の生活のための豊饒祈願としてみごとに生かされている。(中略)その祭りの演出と構成が、山の神、田の神、狩りの神という変身の体系においてなされている(後略)<sup>37)</sup>」と述べている。つまり、山で生き抜く人々は山に棲む猪を神の庇護の下で生かすとともに、山の作物を守護し山に住む人々をも生かす存在としての山の神を敬う日常を背景にして、祭りを行い神楽を演じてきたのであろう。

## 2. アンケート調査に見られた山の暮らし

銀鏡神社と高千穂神社の事例から、かつて狩猟や焼畑を生きていくための必須の営みとする山の暮らしが両地域に存在したから、神饌として猪が供えられ、直会で猪を食材とした料理が食され、神楽の中に獅子舞やシシトギリのように猪の生態や猪猟を模した舞いが伝承されていると推察した。ここでは、さらにそのことが他の地域でも言えるのかどうかを、熊本県と宮崎県の全市町村を対象にしたアンケート調査にもとづいて検討する。

アンケート調査で、神楽などの舞いが奉納される祭りにおける、神饌、あるいは座つきや直会などのように氏子や宮司、その他関係者用の特別な食事、あるいは神楽の最中に当該地域の人々や観光客にふるまう食べ物の内容と、神楽の中に猪などの山の獣や狩猟に関係のある舞が存在するかどうかと存在する場合にはその内容をたずねた。表3に、それらの回答中から、神饌あるいは直会やふるまいの食事の材料として狩猟の獲物が、さらに山の獣や狩猟に関係のある神楽の存在が記入されていた神社と神楽名を示した。なお、銀鏡神社のように豆腐は猪の代用として用いられることもあるので、そのような事例も示してある。

表からわかるように、神饌として、猪肉(猪頭を含む)が供えられるのは熊本県八代郡泉村の葉木神楽と樅木神楽、宮崎県西臼杵郡椎葉村の財木神楽・追手納神楽・向山日添神楽・嶽之尾神楽・村椎神楽・大藪神楽、同県東臼杵郡高千穂町の高千穂神社、同郡諸塚町の南川神社、児湯郡西米良村の米良神社、西都市の八重神社と銀鏡神社、および日南市の大宮神社で、豆腐が供えられるのは宮崎県胡麻山神楽で、鹿肉が供えられるのは泉村の葉木神楽と樅木神楽、椎葉村の嶽之尾神楽と木浦神楽と大藪神楽で、山鳥が供えられるのは宮崎県西臼杵郡五ヶ瀬村の古戸野神楽、西米良村の米良神社、西都市の八重神社であった。また、直会で猪料理が食されているのは椎葉村の向山日添神楽、高千穂町の高千穂神社、西米良村の米良神社、西都市の八重神社と銀鏡神社であった。同様に、神楽の観客にふるまう料理の食材として猪や鹿の肉が用いられているのは泉村の葉木神楽と樅木神楽、椎葉村の木浦神楽・胡麻山神楽・村椎神楽・大藪神楽・上椎葉神楽、

表3. 祭りにおける神饌・直会・ふるまいおよび舞にみられる狩猟とのかかわり

県	市町村	神社名 神楽名	神 饌				直会 猪料理	ふるまい			神 楽		
			豆 腐	猪 肉	鹿 肉	山 鳥		豆 腐	猪 肉	鹿 肉	獅子 舞	狩猟 舞	猪頭 舞
熊 本 県	熊本市	藤崎宮								●			
	牛深市	魚住吉神社								●			
	宇土市	西園神社								●			
	蘇陽町	秋葉神社									●		
本 泉 村	葉木神楽		●	●				●	●				
	樅木神楽		●	●				●	●				
宮 崎 県	椎葉村	財木神楽		●								●	
		追手納神楽		●								●	
		向山日添神楽		●			●					●	
		嶽之尾神楽		●	●							●	
		木浦神楽			●			○	●	●			
		胡麻山神楽	●						●	●			
		村椎神楽		●				○	●	●			
		大藪神楽		●	●				●	●			
	上椎葉神楽		●					●	●				
	十根川神社										●		
高千穂町	高千穂神社		●			●	●	●					
諸塚村	南川神社		●				●	●	●				
五ヶ瀬町	古戸野神楽				●								
西米良村	米良神社		●		●	●							
西都市	八重神社		●		●	●						●	
	銀鏡神社		●			●				●		●	
日南市	大宮神社		●										

●：神饌・直会・ふるまいに使用，舞を奉納  
○：現在，猪肉の代用として使用

高千穂町の高千穂神社、諸塚町の南川神社であった。さらに、神楽として獅子舞が奉納されているのは熊本市の藤崎宮、牛深市の魚貫住吉神社、宇土市の西岡神社、諸塚町の南川神社、西都市の銀鏡神社で、狩猟を模した舞いが奉納されているのは蘇陽町の秋葉神社、椎葉村の追手納神楽・向山日添神楽・嶽之尾神楽・十根川神社で、猪猟の舞いが奉納されているのは西都市の八重神社と銀鏡神社であった。

神饌あるいは直会やふるまいの材料に猪などが用いられている神社や神楽の所在市町村は、大宮神社のある日南市を除いたすべてが、熊本県と宮崎県の境界、つまり九州脊梁地帯に集中している。九州脊梁地帯は、佐々木の九州地方焼畑分布図によると焼畑農家率が高い<sup>39)</sup>。そこで、50年センサスから、当該市町村の当時の農家総数、常畑総耕地面積、焼畑・切替畑の戸数と面積を抜粋し、さらにその数値から農家1戸あたりの常畑総耕地面積および焼畑農家率を算出し、その結果を表4に示した。表4から明らかのように、葉木神楽のあった葉木村と樅木神楽のあった樅木村は焼畑農家率が100%で常畑総耕地面積が極めて少なく、農家1戸あたりの常畑総耕地面積が熊本県平均の約1/5以下である。この2村ほどではないが、椎葉村、西米良村、東米良村、諸塚村も焼畑農家率が高く農家1戸あたりの常畑総耕地面積は県平均の約半分である。つまり、50年センサスによると、高千穂町と三ヶ所村と日南市を除いた他の町村は、いずれも当時焼畑で食料生産がなされていた地域と推察できる。

同様に、表3と表4から、狩猟や猪猟などを表現した舞いが奉納されている祭りや神楽の所在する市町村の中で柏村を除いた他の町村は、いずれもかつては焼畑農耕で食料生産がなされていた地域と考えられる。

したがって、50年センサスより、高千穂町と三ヶ所村と日南市と柏村以外の、神饌あるいは直

表4. 表3における各神社・神楽所在市町村別の1950年当時の農家経営状態

県	神社名・神楽名	1950年 当時の 市町村	農家総数 戸	常畑総耕地面積				焼畑・切替畑		農家 1戸あたり 常畑総耕地 面積 町	焼畑 農家 率 %
				田 町	普通畑 町	樹園畑 町	計 町	農家数 戸	面積 町		
熊 本	県全体		172,159	72,714.25	51,857.29	7,168.85	131,740.39	12,749	1,064.98	0.76	7.4
	藤崎宮	熊本市	4,408	1,613.16	1,240.13	53.46	2,906.75	8	0.28	0.66	0.2
	魚貫住吉神社	魚貫村	412	65.07	99.13	2.37	166.57	1	0.02	0.40	0.2
	西岡神社	轟村	278	195.86	47.22	2.89	245.97	—	—	0.88	—
	秋葉神社	柏村	580	205.48	569.20	2.20	776.88	13	2.04	1.34	2.2
	葉木神楽 樅木神楽	葉木村 樅木村	2 54	— 0.87	— 6.39	— 0.64	— 7.90	2 54	1.23 43.99	— 0.15	100.0 100.0
宮 崎	県全体		114,021	44,736.76	37,744.97	1,977.79	84,459.52	3,154	301.98	0.74	2.8
	財木神楽・追手納神楽・向山日添神楽 嶽之尾神楽・木浦神楽・湯森山神楽 村屋神楽・大蔵神楽 上椎葉神楽・十根川神社	椎葉村	1,088	265.60	227.38	6.85	499.83	770	91.77	0.46	70.8
	高千穂神社	高千穂町	1,057	385.89	321.39	8.66	715.94	9	2.84	0.68	0.9
	南川神社	諸塚村	636	120.10	166.23	5.25	291.58	174	19.96	0.46	27.4
	古戸野神楽	三ヶ所村	771	269.80	259.15	12.51	541.46	59	4.11	0.70	7.7
	米良神社	西米良村	357	119.02	28.67	0.48	148.17	190	16.01	0.42	53.2
	八重神社・銀鏡神社	東米良村	453	112.01	82.76	7.76	202.53	223	15.74	0.45	49.2
	大宮神社	日南市	3,094	1,335.17	456.08	40.31	1,831.56	196	15.51	0.59	6.3

注1：『市町村別統計表 1950年世界農業センサス No43熊本県とNo45宮崎県』によって作表

注2：農家1戸あたり常畑総耕地面積=常畑総耕地面積の計/農家総数

注3：焼畑農家率=焼畑・切替畑農家数/農家総数

会やふるまいの材料に猪などが用いられ、あるいは狩猟や猪猟などを表現した舞いが奉納されている地域では、いずれもかつては焼畑農耕が営まれていたと推察できる。柏村と高千穂町と三ヶ所村と日南市の場合、前述したように聞き取りなどから高千穂も焼畑農耕地域と推察できたことと、柏村も三ヶ所村も九州脊梁地帯に位置していることから、焼畑を営んでいた可能性が考えられるものの、今回の調査では何とも断定しがたい。しかし、柏村と三ヶ所村と高千穂町は九州脊梁地帯に位置していることから猪を貴重な食材とする山の暮らしが営まれていたことは確かであろう。日南市にある大宮神社については、今回の調査では何とも言えない。

また、獅子舞が奉納されている地域は、必ずしも山間の市町村でもないし焼畑農耕地帯ではなかった。前述したように、銀鏡神社の獅子舞は、獅子面をつけて猪に扮した舞い手がニズリの所作をしたり、山の作物をむやみに荒らさぬよう山の神役の舞い手が猪を遊ばせる所作をするなど、山の神が禽獣である猪を守護し愛撫し、言わば猪のごきげんを取り結んで豊作を招来させようとする山の人々の気持ちがこめられた舞いであった。獅子舞といった場合、銀鏡の獅子舞とは異なる『唐獅子舞』を指すこともある。今回の調査では、獅子舞についての具体的な所作や言い伝えが不明なため、銀鏡以外の獅子舞についての検討は不可能である。したがって、今後の課題として、獅子舞に関する具体的な舞いの所作や言い伝えなどを調査し、猪の生態や猪と人々の暮らしとのかかわりを表現した舞いか唐獅子舞かを吟味した上焼畑との関連性を検討する必要がある。

さらに、九州の卓越した焼畑村である五木村からは今回回答が得られなかった。五木村についての検討も今後に残された課題である。

ところで、我が国の焼畑では、粟、稗、蕎麦、トウキビ、キビなどの雑穀類と里芋が栽培されていた<sup>39)</sup>。そこで、これらの雑穀や芋や大麦・小麦を神饌あるいは直会やふるまいの料理の食材として用いている神社や神楽の所在地は焼畑耕作地域かどうか検討してみよう。表5に、粟、稗、蕎麦、トウキビ、キビなどの雑穀類と里芋を神饌あるいは直会やふるまいの食事の材料にしている神社や神楽名を示した。表5は、表3より牛深市の魚貫住吉神社、宇土市の西岡神社、蘇陽町の秋庭神社、椎葉村の向山日添神楽・村椎神楽・大藪神楽・十根川神社、西米良村の米良神社、西都市の八重神社と銀鏡神社、日南市の大宮神社が除かれ、新たに熊本県菊池郡大津町の天之神社、同県上益城郡益城町の木山神社と津森神社、同郡矢部町の男成神社、阿蘇郡白水町の八坂神社、同郡蘇陽町の今村観音社、宮崎県東臼杵郡東郷町の坪谷神社、同県西臼杵郡五ヶ瀬村の祇園神楽、同県都城市の稲荷神社が加わっている。表6に、表4と同様に、50年センサスから当該市町村の当時の農家総数、常畑総耕地面積、焼畑・切替畑の戸数と面積を抜粋し、さらにその数値から農家1戸あたりの常畑総耕地面積および焼畑農家率を算出して示した。表6より、天之神社のあった平真城村、木山神社のあった木山町、津森神社のあった津森村、稲荷神社のあった都城市には焼畑・切替畑農家が存在せず、さらに八坂神社のあった白水村、今村観音社のあった菅尾村、男成神社のあった御嶽村は焼畑・切替畑農家戸数が少なく、農家1戸あたりの常畑総耕地面積は県平均をいずれも上回っていた。また、これらの町村の中で、御嶽村を除いた市町村では田より普通畑が広がった。したがって、粟、稗、蕎麦、トウキビ、キビなどの雑穀類と里芋と大麦・小麦などを神饌あるいは直会やふるまいの料理の食材として用いている神社や神楽の所在地は焼畑耕作というより、畑作と関連があるのかもしれない。

神崎<sup>40)</sup>によると神饌には生物を供える生饌と煮物や焼き物など火を通した料理である熟饌があり、日々の神饌は熟饌で祭りのときの神饌は生饌であるという。それは、日々の神饌である日供は神様といえども酒と飯と塩、つまり広義な意味での飯と一汁一菜の熟饌であり、いわば神人

表5. 祭りにおける神饌・直会・ふるまいおよび舞にみられる焼畑産物とのかかわり

県	市町村	神社名 神楽名	神 饌		直 会		ふるまい		
			粟と稗・ 蕎麦きび	大麦・ 小麦	蕎 麦	里 芋	粟と稗・ 蕎麦きび	大麦・ 小麦	里 芋
熊 本	熊本市	藤崎宮	●						
	大津町	天之神社	●						
	益城町	木山神社	●						
		津森神社	●						
	矢部町	男成神社	●						
	白水村	八坂神社	●						
	蘇陽町	今村観音社	●				●		
泉村	葉木神楽	●				●			
	樅木神楽	●							
宮 崎	椎葉村	財木神楽	●						
		追手納神楽	●						
		嶺之枝尾神楽			●		●		
		木浦神楽				●			
		崩麻山神楽	●				●	●	●
	上椎葉神楽					●			
	高千穂町	高千穂神社					●		
	諸塚村	南川神社					●		
	東郷町	坪谷神社	●	●					
	五ヶ瀬町	古戸野神楽	●	●			●	●	
祇園神楽		●							
都城市	稲荷神社	●							

●：神饌・直会・ふるまいに使用

共食するのだという。これに対し、祭りのときの神饌が生饌なのは、神人共食の意ではなく、その年の豊作を感謝し次の年の豊作をも祈念する、ある種の見本であるという。

今回の結果から、猪や鹿などの猟の獲物である鳥獣を神饌としているのは、九州脊梁地帯の隔絶山村の焼畑農耕地帯であった。このことから、九州脊梁地帯の隔絶山村に住む人々は、焼畑を荒らす害獣であると同時に貴重な食料源である猪の繁殖と豊猟を祈る気持ちをこめて、猪を神饌として供え、あるいは直会やふるまいの食材にしたのではと思われる。また、雑穀や芋の神饌は焼畑農耕地帯というより普通畑農耕地帯であったことから、焼畑というより常畑における豊饒を祈る気持ちの現れと見た方が適切かもしれない。

ともかく、銀鏡と高千穂の事例から、猪を神饌や直会の食材とし、猪猟を模した神楽があるのは、その地域に猪猟と焼畑農耕を営む山の生活が存在したからであると推察した。同様のことがアンケート調査の結果からおぼろげではあるが明らかとなったといえよう。

表6. 表5における各神社神楽所在市町村の1950年当時の農家経営状態

県	神社名・神楽名	1950年 当時の 市町村	農家総数 戸	常畑総耕地面積				焼畑・切替畑		農家	
				田 町	普通畑 町	樹園畑 町	計 町	農家数 戸	面積 町	1戸あたり 常畑総耕地 面積 町	焼畑 農家 率 %
	県全体		172,159	72,714.25	51,857.29	7,168.85	131,740.39	12,749	1,064.98	0.76	7.4
熊 本	藤崎宮	熊本市	4,408	1,613.16	1,240.13	53.46	2,906.75	8	0.28	0.66	0.2
	天之神社	平真城村	358	38.84	357.18	11.06	407.08	—	—	1.14	—
	木山神社	木山町	402	98.96	222.14	2.78	323.88	—	—	0.81	—
	津森神社	津森村	549	123.90	636.32	12.95	773.17	—	—	1.41	—
	男成神社	御嶽村	470	316.40	179.67	0.32	496.39	6	0.14	1.06	1.3
	八坂神社	白水村	913	518.97	944.97	3.11	1,467.05	1	0.01	1.61	0.1
	今石見神社	管尾村	242	101.03	205.50	0.98	307.51	1	0.07	1.27	0.4
	葉木神楽	葉木村	2	—	—	—	—	2	1.23	—	100.0
	縦木神楽	縦木村	54	0.87	6.39	0.64	7.90	54	43.99	0.15	100.0
宮 崎	県全体		114,021	44,736.76	37,744.97	1,977.79	84,459.52	3,154	301.98	0.74	2.8
	椎葉村	椎葉村	1,088	265.60	227.38	6.85	499.83	770	91.77	0.46	70.8
	高千穂町	高千穂町	1,057	385.89	321.39	8.66	715.94	9	2.84	0.68	0.9
	諸塚村	諸塚村	636	120.10	166.23	5.25	291.58	174	19.96	0.46	27.4
	東郷村	東郷村	1,513	617.79	356.75	12.79	987.33	37	1.93	0.65	2.4
	三カ所村	三カ所村	771	269.80	259.15	12.51	541.46	59	4.11	0.70	7.7
	鞍岡村	鞍岡村	376	179.30	90.82	3.95	274.07	30	1.40	0.73	8.0
	都城市	都城市	6,482	1,926.73	2,139.90	119.16	4,185.79	—	—	0.65	—

注1：『市町村別統計表 1950年世界農業センサス No43熊本県とNo45宮崎県』によって作表

注2：農家1戸あたり常畑総耕地面積=常畑総耕地面積の計/農家総数

注3：焼畑農家率=焼畑・切替畑のある農家/農家総数

ま と め

九州脊梁地帯で狩猟採集と焼畑に依拠して暮らしていたお年寄りあるいはその家族をインフォーマントする、1930年頃の食生活についての聞き取り調査の一環として、銀鏡神社の例大祭と銀鏡神楽、高千穂神社のシシカケ祭りとシシカケ神楽の2事例についての聞き取り調査と、熊本・宮崎両県内の各市町村を対象とし、猪を神饌としあるいは直会の食材にする祭りや猪の生態や狩猟を模式的に表現している神楽の存在について、質問紙によるアンケート調査を行い、焼畑とのかかわりを検討した。その結果、次のことが明らかとなった。

宮崎県西都市銀鏡に伝承される銀鏡神社の例大祭では猪が神饌として供えられ直会の食材として用いられ、さらに例大祭で奉納される銀鏡神楽では猪の生態や猪猟を模した舞いが神楽として奉納されていた。同県東臼杵郡高千穂町に伝承されるシシカケ祭りでも猪が神饌として供えられ直会の食材として用いられていた。両地域はともに九州脊梁地帯に位置し、1950年世界農業センサスによると、銀鏡は焼畑によって生活が営まれていた地域と考えられるが、高千穂では焼畑はそれほど行われていなかったものの、聞き取りからより古い時代に焼畑が行われていた可能性が示唆された。したがって、両地域では、かつて狩猟や焼畑を生きていくための必須の営みとする山の暮らしが存在したから、神饌として猪が供えられ、直会で猪を食材とした料理が食され、神楽の中に獅子舞やシシトグリのよう猪の生態や猪猟を模した舞いが伝承されていると推察した。

また、アンケートの結果から、猪・鹿・山鳥などの狩猟の獲物を神饌として供えあるいは直会の食材として用いる祭りや狩猟や猪猟と関連する神楽を奉納する神社のほとんどが、九州脊梁地

帯に集中し、さらにその所在市町村では、1950年世界農業センサスによるとかつては焼畑農耕が営まれていたと推察できた。

以上のことから、九州脊梁地帯の隔絶山村で生きる人々は、山の作物を荒らさないように猪が減ずることを望みつつも食料としては貴重な存在である猪の増加を神に祈り、焼畑の害獣である猪を敵視しつつも銀鏡神楽の式29番獅子舞で猪をあやす山の神のように猪を愛するという矛盾をはらむ願いや気持ちをもちながら、狩猟と焼畑に依拠した暮らしを営み、その暮らしぶりが祭りや神楽として今に伝承されているものと推察できた。

### 注及び引用文献

- 1) 田村真八郎(編):日本の風土と食,ドメス出版,東京,209~210(1984);明峰哲雄:ぼく達はなぜ街で耕すか,風涛社,東京,233,1990;石毛直道:VESTA,10,4~15(1992)
- 2) 熊倉功夫,石毛直道(編):外来の食の文化,ドメス出版,東京,230(1988);石毛直道,小松左京,豊川裕之(編):昭和の食,ドメス出版,東京,22(1989);外食産業総合研究センター(編):日本の食文化と外食産業,ビジネス社,東京,13(1992)
- 3) 内食とは家庭で調理される食事,外食とは家庭外で調理され飲食される食事,中食とは内食と外食との中間食,つまりお惣菜とか持ち帰り弁当あるいは調理加工食品など家庭外で調理・加工されたものを持って帰り家でちょっと手を加えて飲食される食事。
- 4) 前掲書(2)日本の食文化と外食産業,12~52
- 5) 例えば,桑畑美沙子(編):食べものを教える,農山漁村文化協会,東京,12~231(1988);桑畑美沙子(編):女と男の未来学,農山漁村文化協会,東京,1994
- 6) 石毛直道(編):東アジアの食の文化,平凡社,東京,75~76(1981);柴田武(編):食のことば,ドメス出版,東京,89(1983)
- 7) 桑畑美沙子:人間らしく食べる知恵の宝庫,芽ばえ社,東京,14~228(1990);桑畑美沙子:ふるさとの暮らしに学ぶ 食文化探訪,芽ばえ社,東京,14~214(1994)
- 8) 桑畑美沙子:未発表
- 9) 桑畑美沙子,角野育子:未発表
- 10) 須藤功:山の標的 猪と山人の生活誌,未来社,東京,17(1991)
- 11) 高千穂町役場:町政要覧 資料編 高千穂,2
- 12) 東米良郷土誌編さん委員会(編):郷土誌 東米良,ウエミ商会,宮崎,142(1989)
- 13) 前掲書(10),295
- 14) 前掲書(10),281
- 15) 前掲書(10),297
- 16) 前掲書(10),298
- 17) 猪猟で鉄砲を持ちマブシで猪を待ち伏せする役割の猟師。
- 18) 猪猟で犬を追い立てる役割の猟師。
- 19) 前掲書(10),305;前掲書(7)ふるさとの暮らしに学ぶ 食文化探訪,182~184;1991年の大祭は120食だったので,米6升到4頭分の猪頭を用いた。
- 20) 前掲書(10),305
- 21) 前掲書(10),374
- 22) 佐々木高明:稲作以前,日本放送出版協会,東京,27と123~124(1971);石毛直道(編):世界の食事文化,ドメス出版,東京,66と76(1973)
- 23) 前掲書(10),52
- 24) 佐々木高明:日本の焼畑 その地域的比較研究,古今書院,東京,43~49(1972)
- 25) 松山利夫:木の実,法政大学出版局,東京,295~306(1982)
- 26) 農林省統計調査部:市町村別統計表 1950年世界農業センサス No45 宮崎県
- 27) 谷川健一:神・人間・動物—伝承を生きる世界—,講談社,東京,185~186(1986);前掲書(24)日

本の焼畑, 294~295

- 28) 前掲書 (25)
- 29) 前掲書 (10), 42~45
- 30) 前掲書 (10), 50~51
- 31) 前掲書 (10), 55
- 32) 前掲書 (10), 258~259
- 33) 前掲書 (30)
- 34) 前掲書 (10), 372
- 35) 前掲書 (24) 日本の焼畑, 124
- 36) 前掲書 (10), 12~16
- 37) 三隅治雄他: 祭りと芸能の旅 6 九州・沖縄, ぎょうせい, 東京, 92 (1978)
- 38) 前掲書 (24) 日本の焼畑, 45
- 39) 阪本寧男: 雑穀のきた道 ユーラシア民族植物誌から, 日本放送出版協会, 東京, 33 (1988)
- 40) 神崎宣武: 日本人は何を食べてきたか 食の民俗学, 大月書店, 79 (1987)